

子供の頃、インド人のイメージとは、“ がっしりとした体、頭にはターバン、腰には剣 ” という姿だった。

その後、何度となくインドカレー屋さんに行ったりして、ターバンを巻いていないインド人を見るものの、小さい頃の強烈なイメージは変わらない。

私の大学時代の研究室には、インドからの研究者が一人いた。やはりカーキ色のターバンを巻いていた(腰に差す剣の代わりに彼は三角フラスコをよく振っていた)。

このインド人、名前をジョハールさんと言う。彼は既に博士だったので、修士課程在学中の私なんぞから見れば大先輩で、いろいろ教えてもらったし、可愛がってもらった。

彼の家でインド料理をご馳走になったし、大学院を卒業する春休みにはインドの彼の家を訪問しようと思ったほどだ(結局実現はしなかったけど)。

彼はその後インドに帰国したはずだ。確か、アムリトサルという街だった様な気がするが正確には覚えていない。

だから尚のことターバンを巻いた人 = インド人、インド人 = ターバンを巻いた人、というイメージがある。

しかしジョハールサン曰く、ターバンを巻くのはシーク教徒だけだよ、と言っていた。そしてそのシーク教徒はインドにたったの2%しかいないそうだ。

ただシーク教徒は商売上手らしく海外に出る人が多い。横浜や神戸にも多くいるらしい。

そういう背景があって、たった2%にも関わらずインド人 = ターバンを巻く、というイメージができあがったようだ。

このターバン、一番短いものでも2.5メートルの生地を使う。記録では400メートルというのがあるらしい。どうでもいいがギネス級だ。

さらにどうでもいいが、ターバンが長いと、毎日巻くのがたいへん、と思っていたら、帽子のようにすっぽりと外れるのである。

また、体ががっしりしているのは、どうもシーク教徒が肉を食べるから、という事も関係していると聞いた。ヒンドゥ教徒は基本的にベジタリアン。シーク教徒は、さすがに牛は食べない様だが、マトンやチキンを食べる事がある。

必ずしもインドを代表としないシーク教徒だが、ジョハールサンのおかげで、インドに来る前から私はインド人が大好きでとても興味を持っていた。

## アムリトサルの街

そしてそして、そのシーク教徒の聖地、アムリトサルにやってきた。

実はここ、パキスタンのラホールから程近い、国境から数十キロ来たところである。

国境を越えたとたんに気づいていたのだが、やはりターバンを巻いた人がやけ多い。

よく考えれば、人口の2%と言っても、2千万人もいるのだから多い訳だ。

あっちをみても、こっちをみてもジョハールさんなので、さすがに本物の彼を捜すのはやめた。

ジョハールさんの肌の色はあまり黒くない。アリア系の人には色が濃いと聞いていたが、彼はもしかしたら違うのかもしれない。

しかしジョハールさんに、パスポートだったか、何かのID だったかを見せてもらった時に、英語で『Black』と入っていた。黒人ってのは、アフリカ系の所謂ブラックアフリカンを差すのかと思っていたが、インド人、しかも割と色の薄いジョハールさんの様な人もブラックに入るといのはかなり意外だった。

もしかしたらイギリス時代の区分なのかもしれない。まあイギリス人も、私に言わせれば、白というよりピンク色の肌だから、白人ってうたうのはどうかと思っているけど。

このアムリトサルには、肌の色が濃い人も薄い人も両方いる。顔つきも大分違う。

いわゆるこれがインド人です、なんて姿は有り得ないみたいだ。

通りは、歩く人、自転車、バイク、リキシャ、馬車、荷車、バイク、車、トラックに加え、牛、犬でごった返している。

ベトナムのバイクの洪水は有名だが、インドでは何でもありで、それぞれのスピードが違うから、実に歩き難い。そしてめちゃめちゃ混雑している。

バイクや車はクラクションを鳴らし放題にしているし、リキシャは音を鳴らす道具を持っている事があるってうるさい。

牛は突然、モーと唸るし、犬は吠えている。

人間に至っては、近づいて来て何か買わせようとする。実にインドである。



道路は広いのだが、車だけでなく、自転車、リキシャ、荷車、バイク、人そして牛、犬が入り乱れている。

しかしさすがにこの環境で生活しているインド人達は凄い。

バイクも車も、人やそれぞれの乗り物のすれすれを通る。車のサイドミラーなんてとっくに壊れているにも関わらず、この距離感覚はたいしたものだ。

リキシャも凄い。自転車を漕いでいる人は、その後ろに繋がっている客車の幅まできちんと把握していて、道に積んである荷物や、停まっているバイクなど、わずか1センチのところをすり抜けて行く。

私のすぐ近くもギリギリで・・・、と思ったら、リキシャの客車にぶつかった。立て続けに次のやつもぶつかった。

スピードがのろいので怪我はないのだが、なんだ、どうやらインド人、自分のリキシャがバイクや車にぶつかるのは気にしてても、人の事になるとあまり意識していないようだ。

人よりリキシャ、リキシャより、バイク、バイクより車が偉いって事か。

インドの牛も凄い。私に向かってずんずん進んでくる。

インドの牛には容赦なく角をはやしたやつもいるので、そんなやつと喧嘩したくない。喧嘩したくないがやってくる。おとなしそうだがそれでも結構怖い。

アタックされるかと身構えたその時、私の足元にあった紙をムシャムシャやりだした。どうやら野牛も、人の事をあまり意識していないようだ。

野良犬も凄い。こいつらも人の事をあまり意識していないようだが、露地にたくさん寝ている。

インドやパキスタンでは狂犬病がすごいので、存在しているだけで結構怖い。

狂犬病は発病したら最後、100%死亡するという病気で、年間の死者は世界で5万人もいるという恐ろしい病気である。

その内、インドでの犠牲者が3万人というから、インドの犬はかなり怖い。

いや実は全ての哺乳類が狂犬病ウイルスにかかるので、牛やリス、コウモリなんかもその対象なのだが、とにかく犬は素早い上に、たくさんいるので厄介だ。

時には牛と喧嘩していたり、犬同士で喧嘩していて、文字どおり“負け犬”が血を流して歩いている事があるのでぞっとする。



どこへ行ってもたくさんの犬がいる。犬も牛も、ゴミをあさって生きている。

先日も5匹の犬に囲まれた。

しっぽを振っているので悪気はない様だ。足元をぺろぺろ舐めようとするが、狂犬病なら唾液にウイルスがあるので、ちょっと怖い。早々に逃げた。

### シーク教徒の聖地 ゴールデンテンプル

シーク教徒の総本山である。

アムリタ・サラスと呼ばれる池がある。

不老不死の妙薬・甘露の池という意味らしいが、150m x 120mほどの大きさの人工のもので、その中心には黄金の寺院が浮かんでいる。

池の回りには、白い大理石の回廊があって、さらにその外側に白い建物がある。

白と黄金が青空に映えて実にきれいだ。池にも白と黄金が映っている。

実はこの水は茶色く濁っているが、そこで沐浴する人も多い。実にインドらしい風景だ。



池の向こうの黄金寺院の中心部に位置する神殿とその向こうの入り口。夕日にとてもきれいに映えている。

この白い建物の内側は聖地に指定されているので、裸足でなければ入れない。だから入り口の手前に靴を預ける場所があり、また足を洗うように通路には水が溜められている。

そして頭にはターバンを巻く。シーク教は髪を隠さなければならないのだそうだ。だからターバンを巻いているのである。喫煙も禁止。

黄金寺院には、槍を持ったガードマンがいて、違反者には厳しく説教するらしい。



槍を持っている黄金寺院のガードマン。大抵はおじいちゃん。でも時には厳しく説教していることも。

外国人も当然ルールを守る必要があるが、ターバンの代わりにバンダナでも帽子でもタオルでもOK。

私もちょっとした布を買って中に入った。

岸の一ヶ所から中央の本殿に続く橋がある。赤い絨毯が何十メートルも敷き詰められている。

巡礼に来るシーク教徒があとを絶たない。

朝早くから夜遅くまで数多くの人々が訪れ、ここにやってきては深々と膝間づいてお祈りをしている。涙を流して感激している人もいる。

本殿の回りでは、そこに居着いちゃっているのでは、と思うほど人々が座り込んで、のんびりとした時を過ごしている。きっと安らぎに包まれているんだろうな。



熱心にお祈りするシーク教徒。左の方の列は寺院中心部の神殿の二階に上がろうとする人。いつも混んでいる。

私にはまだそれほど理解できていないが、宗教にはこうした強い影響力があって、金や物、現代的な価値観を越える事があるって事を、旅をしていると度々思い知る。

旅をしているある日本女性が、『イランの女性はおしゃれが出来ないから可哀想』と真っ黒な格好のイラン女性に向かって言ったところ、『イスラムの規律を守り、幸せに暮らすという事からみれば、オシャレなどちっぽけな事ですわ』と返されたと言う。これ何かも近い話だろう。

所々にあるスピーカーからまったりと流れてくる音楽とお経？はテープなんかではなく、この本堂で行われているライブだった。

この橋のたもとでは、何やらお菓子？の様なやや甘いものを握らされる。両手で受け取り、それを食べる事になっている。2回も食べたが、何で出来ているのか未だに分からない。

## 黄金寺院の施設

この甘い食べ物に触発されて、何となく腹が空いたのでこの寺院の食堂に行ってみる。

ここでもやはり髪を隠し、裸足にならなければいけない。

食堂に行くと、金属のプレート、お椀、スプーンを渡される。インドでは、食べ物には熱が通してあっても、食器が汚染されている場合があるので注意しなければならないのだが、ここではとてもきれいに洗ってあった。聞けばお参りに来る人達がボランティアで働いているそうだ。食堂の脇では、たくさんの女性が食器を洗っていた。

広い講堂の様なところに、幅 0.5 メートル長さ 40 メートルほどの敷物が何列もずらっと並んでいる。入ってきた人々は順番にそこにあぐらで座る。

金属のプレートは食堂の器の様に凹凸が付いていて 4 つの料理が入るようになっているが、出てくるのは豆のカレーのみ。そしてチャパティと水。

チャパティは両手でもらうことになっているらしい。有り難く、うやうやしく頂く(でも渡す方は投げてくるところがインドらしい)。

別のスタッフがバケツに入ったカレーをオタマでとって金属プレートにいれてくれる。色は茶色くなく、むしろ緑色だ。味は豆を塩味で煮て少しカレーを混ぜた感じか。いわゆるカレーの味はほとんどしない。むしろ、甘くないおしるこという感じだ。

だから正直言って美味くはない。話のネタに 1 回ぐらい食べようか、というぐらいなものである(私などは、3 回食べたので、3 回ほど話のネタになりそうである)。

後で思ったが、あまりに美味いと、人がたくさん訪れてたいへんな事になるから、適当に調節しているのかもしれない。

カレー、チャパティ、水ともにお替わり自由。

そして料金は無料。先にも書いたが、シーク教徒は海外で成功しているケースが多く、黄金寺院も成功者の喜捨によって成り立っているという。確かに、シンガポールの印僑はターバンを巻いている人が多かった。



食事をする場所。一列に並んだ敷物に座り、カレーとチャパティ、水をもらう。



黄金寺院の無料の食事。ほぼ 24 時間、こんな食事が無料で食べられる。時にはライスも付く。

このゴールデンテンプルには、巡礼者の為の宿泊施設がある。

巡礼じゃないけど旅行者も泊まれるのだった。外国人専用のドミトリーになっていて、値段は何とまあ無料！

と言ってもベッドがずらっと並んでいる所に寝るだけだが、鍵のかかるロッカーもあるし、シャワールームもあるしトイレは割と清潔だ。シーク教徒って懐が広い。



黄金寺院の無料の宿泊施設。シーク教徒でない、しかも外国人に対しても優しいシーク教徒。ただで泊めてくれる。

同室のスペイン人はユニークなやつだった。

『おれは日本からだ。君はどこから』と聞くと、『君と同じさ』と答える。

『は？』と聞くと、『スピリッツはみな同じ所から来ている』と何ともインド的な答えだった。

この黄金寺院は、インド特有のボルとか強引な客引きとか、乞食には無縁の場所である。そういう事に加えて、寺院と言う特別な場所にいるせいか、何だかとてもリラックスする。寝ている時にそう実感した。



巡礼宿で洗濯をするオバチャン。込んでいる為か、この建物の回りに布団を引き星空の下で寝る人もたくさんいる。

そしてインド人もそうらしい。

この黄金寺院にいるせいなのかよくわからないが、人が生き生きとしている。

特に女性は輝いているような気がする。様々な色のサリーを身にまとっていて、黒いパキスタン女性と比較してそう思ってしまう部分もあるが、やはり黄金寺院の力なんだろうなと思う。

つづく